

Ⅶ アレルギー用薬（鼻炎用内服薬を含む）

1) アレルギーの症状、薬が症状を抑える仕組み

アレルギー（過敏反応）の起こる仕組み等に関する出題については、第1章Ⅱ-1）（副作用）を参照して作成のこと。

ある物質がアレルゲンとなるか否かは、人それぞれによって異なり、複数の物質がアレルゲンとなることもある。主なものとしては、米、小麦、卵、乳、そば等の食品、^{じんあい}塵埃、動物のフケ、ダニ等、様々なものが対象となり、スギ等の花粉のように季節性のものもある。

アレルゲンとなる物質が体内に入り込むと、それを排除するために産生された免疫グロブリンが肥満細胞ⁱを刺激し、細胞間での刺激の伝達を担う化学物質（ケミカルメディエーター）であるヒスタミンやプロスタグランジンなどの物質が放出されて、周囲の器官や組織の表面に分布する特定の^{たん}蛋白質（受容体）と反応することで血管拡張や炎症等を引き起こす。

通常免疫反応の場合、これらの炎症やそれに伴って発生する痛み、発熱等は、人体にとって有害なものを体内から排除するための必要な過程であるが、アレルギーにおいては過剰に組織に刺激を与える場合も多く、そのように引き起こされた炎症自体が過度に苦痛を与えることになる。

そのようにして体の各部位に生じる炎症をアレルギー症状といい、比較的軽度なものとして、流涙や眼の痒み等の結膜炎症状、鼻汁やくしゃみ等の鼻炎症状、^{じん しん しん}蕁麻疹や湿疹、かぶれ等の皮膚症状、血管性浮腫^{しゅ}のようなやや広い範囲にわたる腫れ^は等が生じることが多い。また、アレルギーによる気管支喘息^{ぜん}は、炎症による粘膜の腫れにより、気管支の内径が狭くなるとともに、ヒスタミン等の物質が気管支を収縮させることで引き起こされる。

アレルギー用薬は、アレルギーの諸症状を緩和するため使用される内服薬の総称で、そのうち特に鼻炎症状の緩和のため、鼻粘膜の血管を収縮する成分等を組み合わせて配合されたものを鼻炎用内服薬という。アレルギー用薬では、アレルゲンに反応して放出されるヒスタミンの働きを妨げる作用を有する成分（抗ヒスタミン成分）が主に使われる。

アレルギーの諸症状を緩和するため使用される内服薬以外の医薬品（点鼻薬、点眼薬、外用薬）については、それぞれⅧ（鼻に用いる薬）、Ⅸ（眼科用薬）、Ⅹ（皮膚に用いる薬）を参照して作成のこと。

2) 代表的な配合成分等、主な副作用

鼻炎用内服薬では、抗ヒスタミン成分のほか、鼻の血管を収縮する成分や炎症そのものを抑える成分なども配合されている場合がある。

(a) 抗ヒスタミン成分

ⁱ 免疫機構の一端を担う細胞で、主に粘膜の下や皮膚の深部に存在している。なお、肥満細胞の名称はヒスタミン等の成分を細胞内に多く含むため、細胞自体が大きくなることから付いたものであり、肥満症と関連性はない。

ⁱⁱ 皮膚の下の毛細血管が拡張して、その部分に局所的な腫れを生じるもので、^{じん しん しん}蕁麻疹と異なり、^{かゆ}痒みを生じることは少ない。全身で起こりうるが、特に目や口の周り、手足などで起こる場合が多い。

アレルギーに免疫機構が反応して肥満細胞から放出されるヒスタミンが、周囲の組織にあるヒスタミン受容体と結合するのを妨げることにより、アレルギーが増幅するのを抑える成分（抗ヒスタミン成分）として、マレイン酸クロルフェニラミンや塩酸ジフェンヒドラミン、塩酸ジフェニルピラリン、塩酸プロメタジン、メキタジン等が用いられる。

内服で用いられる抗ヒスタミン成分は、アレルギー症状を示す以外の部位においても、ヒスタミンとその受容体との反応を妨げる。例えば、ヒスタミンは、脳内での興奮を抑える働きがあり、睡眠を調節する働きに対しても影響を及ぼすため、抗ヒスタミン成分による副作用として眠気が現れる（I-3（眠気を促す薬）参照。）。したがって、服用後は事故のおそれがあるため運転等の作業をしないようにしなければならない。なお、まれに眠気とは正反対の作用を生じて、神経過敏や興奮などが起きることもあり、小児や高齢者、脳障害のある人はこの反応を起こす可能性が高く注意が必要である。

また、一般用医薬品として用いられる成分では抗ヒスタミン作用のみならず、抗コリン作用も併せて持つ場合がある。このため、口の渇きが起こったり、排尿が困難になるなどの副作用が現れることがある。口の渇きが続いたり、増強するようであれば、服用を中止して、医師等に相談がなされることが望ましい。

また、塩酸ジフェンヒドラミンは乳汁に移行することから、授乳婦は服用を止めるか、又は服用中は授乳を避ける必要がある。また、塩酸プロメタジンに関する留意点についてはI-5（鎮^{うん}薬）を参照して問題作成のこと。

(b) アドレナリン作動成分

塩酸プソイドエフェドリン、塩酸フェニレフリン等が主に用いられる。アドレナリン受容体を刺激して鼻の血管を収縮することで、鼻炎時の鼻汁、鼻閉（鼻づまり）に効果を示す。これらの症状に対するアドレナリン作動成分の働きに関する出題については、VIII（鼻に用いる薬）を参照して作成のこと。

アドレナリン受容体の刺激は鼻以外の部位でも起こるため、血管を収縮することで血圧上昇等による副作用として、めまいや不眠、神経過敏等が起こりうる。

塩酸プソイドエフェドリンは、高血圧や心臓病、糖尿病、甲状腺機能障害等の診断を受けている人や、前立腺肥大による排尿困難の症状がある人では服用しないこととされている。また、医療用医薬品としてパーキンソン病の治療のために用いられるモノアミン酸化酵素ⁱⁱⁱ阻害剤（塩酸セレギリン等）で治療を受けている場合、体内でのプソイドエフェドリンの代謝が妨げられて、塩酸プソイドエフェドリンの作用が強まるおそれがあるため、治療を受けている医師等にあらかじめ相談するよう促すことが重要である。

また、塩酸プソイドエフェドリンについては、依存性がある成分であり、大量に使用したり長期間に渡って連用がなされると薬物依存につながるおそれがある。本来の目的以外の意

ⁱⁱⁱ 生体物質であるアドレナリンや医薬品として摂取したプソイドエフェドリンなどの物質の代謝に関与する酵素

図で使用されるおそれがある医薬品の販売等に関する出題については、第1章 I-2) (b)を参照して作成のこと。

(c) 抗コリン成分

ベラドンナ総アルカロイド、ヨウ化イソプロパミド等が主に用いられる。鼻腔内の刺激を伝達する副交感神経系の働きを妨げることで、くしゃみ、鼻汁に効果を示す。アセチルコリンと受容体との反応を妨げることで鼻の血管を収縮させる働きもあるが、アドレナリン作動成分に比べて作用は弱いため、鼻閉（鼻づまり）への効果は低い。

抗コリン成分の働き、副作用等に関する出題については、Ⅲ-3（胃腸鎮痛鎮痙薬）を参照して作成のこと。

(d) 抗炎症成分

グリチルリチン酸二カリウム、カンゾウ、塩化リゾチーム等が主に用いられる。炎症による鼻粘膜の腫れを和らげることで効果を示す。これらの成分の働き、副作用等に関する出題については、I-1（かぜ薬）を参照して問題作成のこと。

(e) 生薬成分

ケイガイ、サイシン、シンイ等が主に用いられる。

① ケイガイ

シソ科のケイガイの花穂を用いた生薬。鼻閉（鼻づまり）や喉の腫れに効果を示す。

② サイシン

ウマノスズクサ科のウスバサイシンの根を用いた生薬。鼻閉（鼻づまり）に効果を示す。

③ シンイ

モクレン科のコブシ、タムシバ、ハクモクレン等の花の蕾を用いた生薬。鼻閉（鼻づまり）に効果を示す。

● 漢方処方製剤

漢方の考え方に基づくと、人体における自然治癒の働きに不調が生じるのは、体内での様々な循環がバランスよく行われていないことによって起こるものとされている。漢方処方製剤はアレルギーそのものを対象とするものはないが、皮膚症状や鼻の症状に効果がある製剤を使用者それぞれの体質にあわせて選択することが望ましい。

皮膚症状を主とするものに対して十味敗毒湯、消風散、当帰飲子等が、鼻の症状を主とするものに対して葛根湯加川芎、辛夷、荊芥連翹湯、辛夷清肺湯等が用いられる。

構成生薬としてカンゾウ又はマオウが含まれる漢方処方製剤に共通する留意点に関する出題については、Ⅱ-1（咳止め・痰を出しやすくする薬）を参照して作成のこと。構成生薬としてダイオウが含まれる漢方処方製剤に共通する留意点に関するについては、Ⅲ-2（腸の薬）を参照して作成のこと。

また、化膿性皮膚疾患・急性皮膚疾患の初期、急性疾患に用いられる場合の十味敗毒湯を除くいずれも、比較的長期間（1ヶ月位）服用されることがあり、その場合に共通する留意点に関する出題については、XIV-1（漢方処方製剤）を参照して問題作成のこと。

(a) 十味敗毒湯

化膿性皮膚疾患・急性皮膚疾患の初期、蕁麻疹、急性疾患、水虫に適するとされているが、体が虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸が弱い人では不向きとされている。構成生薬としてカンゾウが含まれる。

化膿性皮膚疾患・急性皮膚疾患の初期、急性疾患に用いられる場合には、漫然と長期の使用は避け、1週間位使用しても症状の改善がみられないときは、いったん使用を中止して専門家に相談がなされることが望ましい。

(b) 消風散

分泌物が多い慢性湿疹に適するとされているが、体が虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸が弱く下痢をしやすい人では、胃部不快感、腹痛等の副作用が現れやすいなど、不向きとされている。構成生薬としてカンゾウが含まれる。

(c) 当帰飲子

冷え症の人における、分泌物が少ない慢性湿疹、痒みの症状に適するとされているが、胃腸が弱く下痢をしやすい人では、胃部不快感、腹痛等の副作用が現れやすいなど、不向きとされている。構成生薬としてカンゾウが含まれる。

(d) 葛根湯加川芎辛夷

鼻閉（鼻づまり）、蓄膿症、慢性鼻炎に適するとされているが、体が虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸が弱い人、発汗傾向の著しい人では、悪心、胃部不快感等の副作用が現れやすいなど、不向きとされている。構成生薬としてカンゾウ、マオウが含まれる。

(e) 荊芥連翹湯

蓄膿症、慢性鼻炎、慢性扁桃炎、にきびに適するとされているが、胃腸の弱い人では、胃部不快感等の副作用が現れやすいなど、不向きとされている。構成生薬としてカンゾウが含まれる。まれに重篤な副作用として肝機能障害が起こることが知られている。

(f) 辛夷清肺湯

鼻閉（鼻づまり）、慢性鼻炎、蓄膿症に適するとされているが、体が虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸が弱く冷え症の人では、胃部不快感等の副作用が現れやすいなど、不向きとされている。

まれに重篤な副作用として肝機能障害、間質性肺炎が起こることが知られている。

3) 相互作用、受診勧奨

【相互作用】 鼻炎用内服薬は内服で用いられるものであるが、鼻炎用点鼻薬や痔疾用薬など外

用で用いられるものとは相互に作用し合わないとの誤った認識に基づいて、鼻炎用内服薬と鼻炎用点鼻薬が併用されることのないよう注意が必要である。

【受診勧奨】 アレルギー症状を抑える医薬品の使用は、基本的に対症療法であって、アレルギー症状を軽減するにはアレルゲンを除去するなどの根源的な対応が重要である。症状の原因となるアレルゲンは人によって異なることから、どのようなアレルゲンにより症状が引き起こされているのか見極められることが重要である。

一般用医薬品での対処は、原則として一時的な対応に限られるべきであり、長期間使用しても症状の改善がみられない場合には、医師の診療を受けることが望ましい。その上で、日常生活においてアレルゲンを除去する方法のみならず、減感作療法^{iv}と呼ばれるアレルゲンに対する過敏性を抑える治療法等もある。

皮膚症状が治まると喘息^{ぜんそく}が現れるというように、アレルギーの症状が連鎖的に現れることがある。このような場合、一般用医薬品を使って一時的な対応を図るよりも、医療機関で総合的な診療を受けた方がよい。

なお、医薬品もアレルギーの原因物質となるため、抗アレルギー用薬等を使用して蕁麻疹^{じんしん}等の症状が現れる場合もある。抗アレルギー用薬に限らず、医薬品を用いてアレルギー性の症状が現れたときは、直ちにその医薬品の服用を中止して、医療機関を受診することが望ましい。

^{iv} 減感作療法については、医療機関においてアレルゲンを特定する検査を受けた上で、医師の指導の下に行われるべきものであり、健康食品等を利用して行うことは、かえって重篤なアレルギー反応を引き起こすことがある。